

Thiophenicol の細菌性赤痢に対する使用経験

深 谷 一 太

東大伝研内科 (主任: 北本 治教授)

(昭和 41 年 1 月 11 日受付)

ま え が き

Thiophenicol(TP) はアメリカおよびイタリーで研究され、Chloramphenicol (CP) と近似の化学構造を有するが、別種の合成化合物とされ、腎よりの排泄量の多い点に特徴があるとされる。このものについて、細菌性赤痢患者に対する使用成績ならびに 2, 3 の基礎的検討を行なった結果について報告する。

1. 赤痢菌の感受性値

患者分離株 35 株, 標準 *fl.* 1b 1 株計 36 株の感受性値は表 1 の如くで、CP 耐性菌はすべて TP にも交叉耐性を示した。また感受性菌では倍数希釈にて 1 段階程度 CP よりすぐれているものが多かった。

2. 臨床成績

表 2 は TP を細菌性赤痢として当院に入院した患者に経口投与したときの成績で、症例 1, 2, 9~12 の 6 例では 1 日 2g 分 4 にて 5 日間、症例 3~8 までの 6 例では 1 日 3g 分 4 にて 5 日間投与を行なった。

症例 1. M.O. 29j ♂

3 者耐性菌 *fl.* 2a を検出した例で、赤痢菌が投与終了翌日にも検出されたので、他剤投与に変更したが、2

表 1 赤痢菌の CP および TP に対する感受性

MIC mcg/ml	CP	TP
0.8	0	5
1.6	6	4
3.1	3	1
6.3	6	15
12.5	12	2
25	0	0
50	0	0
100	0	0
100<	9	9
計	36	36

日間排便がなかつたあとの検便では既に陰性となつていた。本例では CP 耐性菌であつたため、効果が十分でなかつたといえよう。

症例 2. S.T. 34j ♂

感受性菌 *fl.* 3a であつたが、菌消失はおくれて 6 日にみられ、他剤追加投与を行なった。しかし一応 TP による効果が臨床的にみとめられ、病原体的にも有効と

表 2 Thiophenicol の細菌性赤痢に対する使用成績

※ 引続いて他剤投与を行なった例

症 例	菌	入院時		薬 剤	解 熱 日 数	血 液 消 失	粘 液 消 失	菌消失	便 性 回 復	効 果		備 考
		体温	便回 数							臨床的	病 原 体 的	
1. 29j ♂	2a 3者耐	平	1	1日2g 分4	—	3	3	5<	3	+	—	※
2. 34j ♂	3a 感	平	1	5日間 経口	—	3	7	6	7	+	—	※
3. 49j ♀	son 3者耐	37.5	6	1日3g	1	—	13<	6	13<	—	—	※
4. 43j ♂	2a 感	38.5	10	"	1	—	—	1	3	+	+	
5. 31j ♂	—	38.1	15	"	1	—	—	—	5	+	/	
6. 53j ♂	—	37.6	2	"	3	—	4	—	4	+	/	
7. 52j ♂	—	38.2	6	"	1	—	4	—	4	+	/	
8. 18j ♀	—	37.7	8	"	1	1	3	—	3	+	/	
9. 68j ♀	—	平	6	2g	—	5	12	—	12	±	/	
10. 20j ♂	—	平	2	"	—	4	6	—	6	+	/	
11. 26j ♂	—	平	2	"	—	—	2	—	2	+	/	
12. 14j ♂	—	平	5	"	—	—	1	—	5	+	/	

